

学校名：新潟市立丸山小学校

氏名：脇坂 聡美

[担当教科：全教科]

- 実践教科等：総合的な学習の時間
- 時間数：8時間
- 対象生徒：6年生
- 対象人数：45人

1 単元名

「丸山発世界の旅 ～私たちにできること～」

2 単元の目標

ESD の視点に立った学習指導で重視する能力・態度(国立教育政策研究所が例として示したもの)

- ・世界の多様な文化・生活を知り、共通点・相違点に気づき、世界への興味をもつ。
(進んで参加する態度)
- ・相手意識を持ち、相手のニーズに基づいて自分にできることを考え、実践することができる。
(未来像を予測して計画を立てる力)
- ・世界で国際協力をして活躍する日本人の仕事内容や思いを知り、その活動が人々に与える影響力を多面的に捉えることができる。(多面的・総合的に考える力)

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

- 1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る
- 2 子供の多様な考えを引き出す
- 3 考えを深めるために対話のある活動を導入する
- 4 考えるための教材を見極めて提供する
- 5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する
- 6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する
- 7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元では、世界の国々の文化や生活習慣について、日本との共通点や相違点、日本が世界に対して行う国際協力について考える学習活動を通して、相手の立場を尊重しつつ主体的に行動する態度を養うことをねらいとした。

本校では、画家 熊倉雄二氏を介してモンゴルにあるグルワントミル校と絵画交流を行っている。今年で15年目を迎えるこの活動を軸として、単元を展開していく。そこで、第1時では、絵画交流で送られてきたモンゴルの子供たちの絵を鑑賞し、モンゴルに興味・関心を持てるようにする。そして、子供たちから質問事項等を集め、現地で確かめてくることを伝える。その後、子供たちは、モンゴルの文化や生活習慣、モンゴルと日本とのつながりについて考える活動、国際協力について学習していく。また、実際に自分たちにできることとして、モンゴルへ送る絵画の作成を計画し、実施する。

単元を通して、他国の習慣や文化の中に「共通点を見つけること」、「相手意識を持つこと」、「行動を起こすこと」、「多面的に捉えること」の大切さに気付かせたい。

(2)児童生徒観

本校の6年生児童は、これまでの総合的な学習の時間において、キャリア教育として様々な職業の方から話を聞いて学ぶ学習を積み重ねてきた。新たな知識を取り入れたり、体験したりすることから、意欲的に知識を学び取ってきた。また、友達と関わり合って学ぶ場面では、互いの考えを認め合い、よりよいものをつくり上げようとする姿が見られる。

モンゴルのグルワントミル校との絵画交流には、6年生児童全員が参加した経験がある。しかし、子供たちのほとんどが、明確な相手意識を持たないまま、絵画作成にあたっていた。また、世界の文化や習慣について、興味を抱く子供たちは少なくないが、日本と他国との関わりや国際協力等については、知っている子供と知らない子供で偏りがある。

(3) 指導観

子供たちが地球市民の一員として生きていくで、国際理解という視点は必要不可欠である。自分とは異なる文化や考え方を受容し、相手の立場を踏まえた上で、主体的に考えを発信していく力を身に付けてほしい。

これまで、世界の国々について、その国の位置を地図で確かめたり、写真やグラフ等のデータで国の特徴を読み取ったりする学習に取り組んできた。しかし、子供たちにとって「世界」は漠然としたものであり、世界と自分たちとのつながりを実感できる学習には至っていない。

今回の単元では、子供たちが「見たい」「知りたい」と思ったものを中心に撮った写真や映像、実物を資料として使うことで、世界に興味を持ち、具体的に思い描くことができるようにする。さらに、子供たちの疑問や考えを中核として、授業を展開していくことで、主体的に思考する姿をねらう。

また、実際にモンゴルを訪れて感じた、「世界は人と人とでつながっている」ということを子供たちに実感させたい。そこで、研修を通して出会った人々の写真や映像を活用することで、相手意識を持てるように工夫していく。人々の想いや温度を感じ取れる教材を提示していきたい。

単元を通して、子供たちが新しい知識を意欲的に取り入れ、相手意識を持って行動を起こし、自身の考え方の変容や成長に気付くことができるようにしていきたい。

5 評価規準

観点	よりよく問題を解決する資質や能力	学び方やものの考え方	主体的、創造的、協同的に取り組む態度	自己の生き方
評価規準	相手が必要としていることや欲していることを根拠として、相手意識を持った活動を計画し、実践している。	世界の習慣や文化、国際協力について、多面的に考えている。	他国の文化や生活の様子に関心を持ち、疑問に思ったことや気づいたことについて考えている。	相手意識を持ち、行動することの大切さを知り、世界と自分とのつながりについて考えたことをまとめている。
評価方法	学習の様子 発言 ワークシート 絵画	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート	学習の様子 発言 ワークシート

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	モンゴルってどんな国？	絵画交流でモンゴルから送られてきた絵から、分かったことや疑問に思ったことについて考える活動を通して、モンゴルに興味・関心をもつことができる。	・モンゴルの基本情報(位置、国旗、国土の広さ)を知る。 ・モンゴルの子供たちが描いた絵を見て、分かったことや疑問に思ったことを付箋に書き込み、グループで話し合う。 ・モンゴルについて、もっと知りたいことをワークシートに記入する。
2	モンゴルってどんな国	モンゴルで撮影された写真を多面的に読み取る活動を通して、日本との共通点を見つけることができる。	・(事前に子供たちから集めた質問事項を軸に、撮影した)モンゴルの写真を見て、日本との共通点を見つける。 ・日本との共通点を「似ている%」として、線グラフに表す。 ・学習の最後に、モンゴルの中学生在が日本語を流暢に話す映像を見る。
3	モンゴルと日本	モンゴルと日本のつながりについて、歴史的背景・モンゴルの子供たちの夢・日本人が日本語を教えていることを知る。	・子供達から出た「なぜ、あのモンゴル人の女の子は、日本語が上手なのか。」という疑問をもとに、日本とモンゴルのつながりを探っていく。 ・歴史的背景・モンゴルの子供たちの夢・日本人が日本語を教えていることを知る。

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

4	どんな絵を送ろう	相手意識を持ち、モンゴルに送る絵画作成の計画を立てることができる。	・グルワンタミル校のウヌルー先生達から子供たちへ向けたメッセージ映像を見る。 ・広島土砂災害の支援物資に関する写真（全国から届いた支援物資で体育館が溢れ返っているもの）から、「相手が必要としている支援を行う」という「要請支援」の考え方を知る。 ・モンゴルの子供たちを対象に行ったインタビュー資料をもとに、どのような絵画を作成するか計画を立てる。
5・6	絵画を作成しよう	計画に基づいて、絵画作成をすることができる。	・相手意識を持ち、絵画作成に取り組む。
		 	
7	国際協力とは	日本人がモンゴルで取り組む国際協力について、資料から国際協力の方法を読み取り、その支援が誰により影響を与えるかを考える学習活動を通して、日本の技術協力や支援の方法・必要性を捉えることができる。	・「国際協力」「JICA」などの用語を知る。 ・JICA の取組を知る。 ・国際協力を行う人の写真とその人のインタビュー資料から、モンゴルで国際協力に取り組む人々の「氏名」「仕事内容」を読み取り、さらに「その活動によって喜び、笑顔になる人々は誰か」ということについてグループで考える。 ・読み取った情報と考えたことを発表し、全体で共有する。
8	世界と私たち	単元の学習を振り返り、世界の人々と共生していくために大切なことについて考え、まとめている。	・以前、子供たちが画家 熊倉氏に対して、送った質問の回答を読み取り、熊倉氏の思いに触れる。 ・単元の学習を振り返り、世界の人々と共生していくために大切なことについて自分の考えをまとめる。

7 授業事例の紹介

小単元名【 国際協力とは 】

(1) 指導案

(ア)実施日時 平成28年10月28日(金)第5限

(イ)実施会場 6年1組教室

(ウ)本時の目標

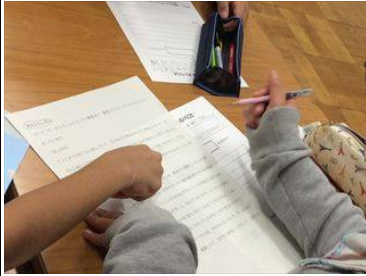
日本人がモンゴルで取り組む国際協力について、資料から国際協力の方法を読み取り、その支援が誰により影響を与えるかを考える学習活動を通して、日本の技術協力や支援の方法・必要性を捉えることができる。

(エ)指導のポイント

①国際協力の方法を積極的に探究させるために、グループごとに異なるインタビュー資料を読み取り、分かったことを全体に紹介するという学習活動を設定した。

②国際協力の取組によって、喜び、笑顔になる人々を複数の立場から考える活動を設定し、一つの事柄を多面的に考える姿をねらう。

(オ) 本時の展開

過程・時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入 5分	前時までの復習	①モンゴルで日本語を教えている日本人がいるということを確認する。	一斉	・前時までの学習内容を想起させる。	
展開 30分	学習課題をつかむ【1】	②国際協力という言葉を知る。		・「平和・安定・発展」という言葉に着目させる。	
	学習課題 国際協力には、どのような支援の方法があるか。				
	JICAの取り組みを学ぶ	③JICAの取組を知る。活動を大きく4つ(A～D)に分けて紹介する。	グループ	・③で紹介した人が行っているのはA～Dのどの活動にあたるかを考えさせる。 ・既習事項である「要請支援」という考え方をおさえる。	■資料から、国際協力の方法とその仕事に誰により影響を与えることができる。(ワークシート)
	国際協力の具体を知り、その活動が人々に与える影響について考える【2】【3】【4】【7】	④資料(インタビュー資料と写真)から、国際協力をしている人とその仕事内容を読み取りまとめる。 また、その活動によって喜び、笑顔になる人は誰かということについて考える。(具体的に2人以上挙げる。)		・活動が誰に影響を与えているのかということについて、多面的に考えさせるようにする。	
					
まとめ 10分	学習をまとめる	⑤各グループで読み取った国際協力をしている人の「氏名」と「仕事内容」、そして「その仕事に誰により影響を与えるか」について考えたことを全体で共有する。	一斉	・「その仕事に誰により影響を与えるか」については、そう考えた理由も説明するように助言する。	
		⑥学習をまとめる。 まとめ ・A～D などの方法がある。 ・国際協力は、世界の人々の笑顔につながっている。	個人		
	本時を振り返る【6】	⑦本時の学習を振り返り、ワークシートに記入する。			

(2) 授業の振り返り

【成果】

・インタビュー映像をそのまま使うのではなく、文章に起こしたことで、子供たちは情報を捉えやすかった

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

ようだ。各グループで、インタビュー資料に線を引きながら、何度も読み返している姿が見られた。

- ・活動している人の顔が分かる写真や、インタビューでの話を書き起こした文章という、具体的な資料を用いたことで、人のストーリーが感じられる学習となった。
- ・発表の場面において、子供たちから「(インタビュー資料で見つけた)活動をしている人の想いも発表していいですか。」という声があがった。写真とインタビュー資料によって相手意識が高まったことが、「国際協力を行う人の想いを伝える」という、子供たちの行動につながった。
- ・国際協力によって喜び、笑顔になる人を考えさせたことは、子供たちに多面的な思考を促す活動として効果的だった。
- ・グループでの話し合い、考えたことの発表などの言語活動が、活発に行われていた。

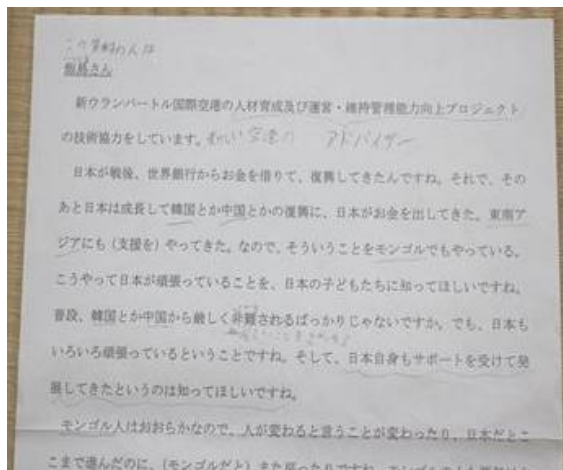
【課題】

- ・提示する写真をもう一枚増やすことで、さらにリアル感を増す。
(例:「国際協力活動をしている写真」と「本人の写真」)
- ・それぞれの活動が、資料1のA～Dのどれに当たるかを考えさせる場面では、単に「この活動は、Aに当たる」という場合だけでなく、「この活動は、AでありBである」という場合もあるため、より深く考えさせるとよい。

(3) 使用教材

① ワークシート

- ② モンゴルで国際協力をしている方のインタビュー原稿 ③ モンゴルで国際協力をしている方の写真
(一部を抜粋したもの)



④ 「国際協力」、「JICA」という用語を説明する掲示物

⑤ 国際協力の主な4つの活動説明する掲示物

JICA の取り組み

- A 専門家がその国の人を教育したり、必要な道具を持っていき、さまざまな技術を伝えたりする。
- B 安心して生活できる国にするために、病院、学校、井戸、道路などを無償でつくれたり、よりよい生活が送れるように道路や橋などを作るためにお金を貸したりする。
- C 大きな災害が起きたときに、被災地に助けに行ったり、物資を送ったりする。
- D NGO、自治体、大学などと一緒に国際協力活動をする。

(4) 参考資料等

- ・ JICA PROFILE (独立行政法人 国際協力機構)
- ・ 「持続可能な開発のための教育(ESD)」は これからの世界の合い言葉(国立教育政策研究所 教育課程研究センター)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

【単元全体について】

- ・国際協力ということを初めて知ったけど、一人がしたこと何人もの笑顔がつかれると思いました。もっとたくさんの笑顔をつくれるように、ぼくたちもそういう活動をしたいです。
- ・国際協力は、困っている人にとっては、とても大切で笑顔になる取り組みだと思った
- ・初めて JICA という組織を知った。ぼくも、そういうこと(国際協力活動)をしている人がいたら、手伝おうと思った。
- ・日本自身もサポートを受けて発展してきたということがいいと思いました。理由は、日本だけではなく、世界の人々からの支援で今があるということだからです。これからは、他国の支援をしたいと思います。
- ・「大人になったら」ではなくて、今からできることはないかと考えて、したいです。

単元の始めには、「モンゴルに行ってみたいと思いました。」という感想に留まる子供たちも多くいたが、学習が進むに連れて、「なぜ、モンゴルの人はトヨタを好きなのか知りたくなった。」、「日本の先生はどうしてモンゴルに行ったのか。」など、主体的に疑問を挙げる姿が見られるようになった。

【絵画交流について】

これまで、子供たちは「富士山、寿司、花火、朱鷺」などの日本を象徴するものをテーマに絵を描いてきた。しかし、本単元で「モンゴルの子供たちによる日本に関するインタビュー結果」をもとに、絵画を作成したところ、これまでとは違う作品が仕上がった。以下にその一例を紹介する。

(○作品のテーマ ・その絵にした理由)

- プール授業 ・モンゴルには海がなく、プール授業もない学校もあるから。
- 習字 ・モンゴルの人が「漢字は美しい」と言っていたから。
- クリスマス ・日本とモンゴルではプレゼントの内容が違うと思ったから。

また、「ウヌルーさんは、交流の絵を楽しみにしているそうなので、すごくいい絵をかきたいと思いました。」という記述や絵画作成の様子から、絵画作成における相手意識がより高まったことを実感した。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

【Plan(計画)】 単元の学習計画を作成した。現地研修前に第1時を行い、事前に子供たちから質問を集めた。また、事前準備として、画家 熊倉雄二氏から絵画交流についての話を伺い、グルワンタミル校 ウヌルー先生と電話で連絡をとった。

【Do(実行)】 ねらいの達成に向かって、子供たちの興味・関心、疑問に思ったことを大切にしたい授業を行った。子供たちが、主体的に考える姿を目指し、写真、映像、実物などの五感を使って感じられる資料を提示した。

【Check(評価)】 活動の様子や発言内容、ワークシートでの記述をもとに、思考の状況を確認した。提示する資料は、より具体的に場面を想像できるものが必要であった。また、子供たちの中に、「支援をしてあげる」という意識がある。「支え合う関係」であることを、より重視した授業づくりをする必要がある。

【Action(改善)】 単元の振り返り(第8時)では、場面がよくわかる写真、画家の直筆のアンケート用紙、現地の雑誌を提示することで資料にリアル感を持たせる工夫をした。世界は「支え合う関係」で成り立っていることについて理解を深めるために、今後も国際理解教育をあらゆる場面で継続的に実施していく。

10 教師海外研修に参加して

私が、国際理解教育の可能性を感じたエピソードを紹介したい。12月のある日、子供たちが係活動としてクリスマスツリーの作成に取り掛かっていた。そこで、係の子供に、どんな飾りにするかを尋ねると意外な答えが返ってきた。

「『世界への願いとそのためにすること』をみんなに書いてもらって貼ります。」

続けて、このテーマにした理由を「モンゴルのことやったから」と語った。私は、心から嬉しかった。国際理解教育が、子供たちの心にじんわりと効いていることを実感した瞬間であった。私は、国際理解教育が、大きな可能性をもつものであることを確信した。

私は、教師海外研修に参加して、「世界は人と人とつながっている」ということを強く実感した。そして、世界をつなぐ第一線で活躍している方々と出会い、私自身の目標がはっきりと見えてきたように思う。それは、「世界をつなぐ子供たちを育てる」ということである。近未来の国際社会を創造する子供たちを育てているという責任感と誇りをもち、国際理解教育に取り組んでいく。そして、自分自身が地球市

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

民性を高められるよう研鑽を積んでいきたい。